

ユニセフ 子ども物語

地球に生きる子どものくらし

East Timor

東ティモール



戦いすんで 海風 吹いて

アグネスと
東ティモールの
子どもたち

夕暮れの風が静かに潮の香を運んできます。白い砂浜をなでる波の音、エメラルドグリーンにきらきらひかる海。

ふと、あたりを見わたしたとたん、つかの間の楽園は消えました。焼けこげた家の梁、破壊された建物の残骸。

赤道に近いここティモール島では1年前に戦争があったのです。島の東側はみんなこわされてぼろぼろになって、でも新しい国になろうとしています。島の西側には、東側から逃げて帰れなくなった人がたくさん残っています。

わたしは、この島でたくさんの子どもたちに出会いました。みんな笑顔を見せてくれたけれど、でも、どこかとても、苦しそだったのです。



カルメリータは、身じろぎもせず、わたしのひざに抱かれていました。かたく閉じた目は、まわりのことはぜったいに見ない、と決めているかのようでした。

かたわらから小さな声が答えました。「お父さんは殺されたって。」カルメリータのお姉さんフランシスカでした。フランシスカは、カルメリータを横目で見ながら話しつづけます。「でも、わたしは見なかったのよ。ぜったい見てない。みんながお父さんはうたれたんだ、って言ったの。」

孤児院の先生は、ふたりのお父さんは、ふたりの見ている前で殺されたてくれました。

「あと、お母さんも赤ちゃんでしまったの。」フラン

シスカの声は、聞きとれないほどでした。涙をこらえられなくなったのは、わたし。フランシスカは、わたしをなぐさめるようにほほえむと、手をにぎりました。

「いとこは、ぼくのお父さんは人殺しだ、って言うんだ。」

シマオの声を聞くと心がずきずきするようです。「でも、そんなこと信じない。お父さんは、いい人だよ。」

シマオのお父さんは元民兵で、戦争が起こったときに罪のない人を殺したのだそうです。今では、島の西側の避難民キャンプに逃れています。

「みんなは、ぼくのお父さんは、ぜったいに帰ってこられない、って言うんだ。でもぼくは、お父さんに会いたいよ。」

孤児院で暮らすようになったシマオは、今でもお父さんが迎えにくるのを待っています。



ペロニカは、早口でまくしたてました。「わたしのお父さんはうたれて死んだ。ちゃんと見たの。」

でも、ペロニカの親せきの人と話をして驚きました。ペロニカのお父さんが亡くなったのは、実は、数年前のことだったのです。

戦争で亡くなったのは、ペロニカのお兄さんでした。ペロニカは、お兄さんが亡くなったところも見たわけではありません。お兄さんはとなりの村で殺され、そのからだはまだ見つかっていないのです。

けれどペロニカは、かたくなに言いづづけます。「わたしは見たの。わたしはここにいて、兵隊たちはあそこにいて。そして兵隊たちはお父さんをうつたのよ。」

ペロニカは、何が起こったのか、本当に知りたかったに違いありません。心の底から真実を見たいと願ったのです。そうして、自分はお父さんが死ぬのを見た、と考えるようになってしまったのです。

わたしは、話を変えました。「ペロニカはどんな食べ物好き？」

答えがかえってきませんでした。ペロニカは、親せきの家で水くみや畑仕事の手伝いをして、日に小さなカップ3ばいのお米をもらっていました。それ以外の食べ物を思い出せなかったのです。

わたしは、持っていた小さなバナナを差し出しました。「食べませんか？どうぞ。」

ペロニカは首をふって、「あとで、誰も見ていないところで、妹と弟にわけます」と答えました。

わたしが出会った子どもたち。つらい、むずかしい、かなしい思いをかかえて、でもどうにかそれをのりこえて生きていこうとしています。

今、多くの人びとがこの新しい国を支えようとがんばっています。ユニセフは学校を再開させました。町にも少しずつ新しい建物ができています。

子どもたちの苦しい思いが1日も早く消えますように。ティモール島を離れる日も海はきらきらと輝いていました。

(文・構成：日本ユニセフ協会)